

「宇宙の人と、とても仲良く話して、すごく楽しかった」

～人それぞれの幸せ～

さやか先生

授業、放課後を通して貴重なお話をうかがうことができ、本当にありがとうございました。いろいろなことが頭の中を巡った水曜日の夜でした。

私は、放課後の席で年の離れた末の弟が統合失調症であると「告白」しました。告白なんていうととてもおおげさだと思いますが、でも、大勢の人の前で弟の話をするのは初めてだったので、私にとってはとても勇気のいることでした。もちろん、あの場で「告白」をせずに、質問をすることもできたのだと思います。でも、「告白」してしまいたかった、という気持ちがどこかにあったのだと今は思っています。

ずっと引きこもっているような状態の弟が「病気である」とわかった時、私たち家族は一瞬、少しホッとしました。今まで長い間、なぜ弟は引きこもってしまったのかわからず、解決の糸口を見つけないことができないでいたのです。

正直に言いますと、統合失調症に対する知識が全くなかったので、「病気を治せば全てが解決する」と思っていました。しかし、この病気がとても難しい病気であり、ましてや弟はかなり長い間病気に気がついていなかったため、どういう状態になるのかわからない、と言われてしまいました。

私は4人兄弟で、兄、私、弟、末の弟という構成です。私を挟んで兄と弟は医者で、二人はこの状態の難しさにすぐに気がついたのだと思います。弟の病気がわかり、入院させることになった時、母に「弟の病気のことを外で話さないように。」と言ったようでした。母はその話を私にしながら、本当に悲しそうな顔をしていました。「隠しておかなければならないこと。」のように、弟が扱われるのが嫌だったのでしょう。病気に対する偏見や、状態がすぐに良くなる可能性が少ないことから、兄と弟は母にそういう話をしたのだと思います。もともと、引きこもっている弟の話を外ですることは少なかったですが、このことで、より弟に関することは話題から外されていきました。

病気がわかるまでの間、弟が宇宙の人と話しながら書いたノートは、目をみはる内容でした。宇宙の人に依頼された靴や洋服のデザイン画、宇宙の人の言葉を理解する

ための辞書など、様々なものが何冊にもわたり書いてありました。本当に、外出先の母に「助けて」と電話をするような事態になるまで宇宙の人ととても仲良く共存していたようです。弟はノートを見せながら「これを考えている時、すごく楽しかった。」と言いました。私はその話を聞いた時、素直に「良かった」と思いました。弟は一人部屋で鬱々としていたのではなく、楽しい時間を過ごしていたのだとわかったからです。

気持ちの整理のつかない母は家族会に参加することにしました。私は初回、母が一人では行きにくいからということで付き添っていきました。その時、皆さんのお話を聞いた後、コメントを求められました。私は、「どんなことがこれから先に起こっても、弟が幸せだと思える時間がたくさんになるように協力したい。」と言葉にして、弟が病気だとわかってから初めて涙が出ました。心から、大事な弟が幸せでいてほしいと思ったのです。

そう思いながらも、私はどこかで病気の弟を受け入れてなかったのかもしれない。私はずっと弟を愛おしいと思っているのに、なかったことのように、話題にすることを避けていたのかもしれない、と思いました。それと、どこかで「告白」すること勇気がなかったのか、、、。でも、どこかで「告白」するきっかけを待っていたのか、、、。

さやか先生がハツラツと話しているのを聞いて、勇気をもらいました。そして、その勇気に触発されて、初めて外で弟のことを話すことができました。話をしたことで、私も本当の意味で弟の病気を受け入れることができたような気がします。

本当にありがとうございました。

最後に一つ。

病気の弟が「楽しかった。」と言ったように、人はそれぞれの価値観や状況の中で幸せを感じて生きているはずだと思います。だから、その「幸せを感じている心」を周囲の人が受け入れることが大切だと。そういう気持ちでいたら病気の人も障害がある人も、認知症の人も、誰でもどんな状態でも幸せを感じていることに気がつくはず。そして、それぞれの幸せを受け入れることのできる社会が必要だと思いました。誰でも幸せになれる社会。日常を心豊かに送ることができる社会、が理想です。